
帰省

市丸乱菊

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰省

【Nコード】

N8032H

【作者名】

市丸乱菊

【あらすじ】

日番谷冬獅郎が帰省します。帰省する道中でいろんな人に会いました。そして・・・

ひと時の休息。

尸魂界の死神たちも羽を休める。

「んじゃ、松本。

俺は明日休みだから後はよろしくな。

．．．．．

くれぐれも！！

さぼるなよ．．．．」

ここは十番隊。

隊長日番谷が副隊長の松本に言った。

「大丈夫ですよ」

いつてらっしゃーい。

ゆっくりしてきてくださいね」

ニコニコして手を振る。

なんかこいつ一人だと心配なんだけどなー……

ばーちゃんも心配だし。

本人がああいうのだからまあ大丈夫なんであろう……。

日番谷は扉のほうに向かっていった。

「あつたいちょー。」

おばあさんによろしく」

「うつうるさいっ！！！」

図星の日番谷は、振り向かず少し赤くなって怒っていた。

西流魂街手前の甘味処で大好きなお土産を買う。

「あつ。日番谷君っ！」

聞き慣れた声が聞こえた。

「雛森……。」

振り返ったその先に、日番谷の幼馴染で五番隊副隊長雛森と五番隊隊長藍染がいた。

「こんにちは、日番谷くん。」

にこっと笑って右手を上げる藍染。

その横には雛森がちよこんと居た。

「ああ。藍染・・・」

「あー。甘納豆買ってるってことは、おばあちゃんち帰るんだ。」

明日休みなの？」

日番谷の手の中のを覗き込む。

「うつせーなあ・・・。」

少し赤くなり後ろに隠した。

「私も明日休みだったら一緒に帰るんだけど・・・。。。。。」

「雛森くん。業務なら気にしないでいいんだよ。」

君はいつも頑張ってくれてるし、明日休んでくれてもいいよ。」

優しい笑顔を副隊長に向ける藍染。

「でも隊長っ……」

少しでも藍染の傍に居たいというのが雛森の本心だった。

「雛森くん。隊長の言う事は聞くもんだよ。」

そう言っただけ雛森の頭をやさしく撫でた。

「わかりました。有難うございますっ。藍染隊長っ」

雛森に満面の笑みがあつた。

「ガキくせー……」

日番谷は面白くない。

「っていつことで、わたしも帰るっておばあちゃんに言っておいてね」

雛森が手を振って走っていく。

「雛森くん。気が早いなあ……」

「じゃあね。日番谷くん。」

右手をさつと挙げ、雛森の下へ歩いていく。

「藍染隊長ーっ！早く来てくださーっ！っ！」

「はいはい。」

藍染は笑みがあるものの、ちょっとした呆れ顔でヤレヤレといった模様。

「さて。俺も行くか。」

そして西流魂街に向かう。

そしてそこには西門がある。

「ややっおめえは・・・!!」

冬獅郎さんだが?」

西門の番人・?丹坊がいた。

「元気そうだな。?丹坊」

日番谷は、そう言うത്?丹坊の元へ走っていった。

「元気だべ!

おんめえも元気そうで何よりだべ。」

「今日はあちゃんちに帰るんだ。」

門を開けてくれよ。」

昔からの友達に子供らしい笑顔を見せる日番谷。

「よっしゃー。」

どいててくんろ。

「一気にいぐどーー。」

門の下に指を入れた。

「ぬづん！！！！」

門が上がる。

「ほら。どおれ！」

「ありがとう。？丹坊っ」

「あたりまえのことだあ」

そうして日番谷が通ると、門が閉じられた。

「毎回思うが流石だな。」

「これぐらいしが、できねーんど。」

「いつものアレやってくれよ」

日番谷は近づいた。

「よっじゃーっ！」

そう言つて？丹坊は日番谷を持ち上げ、そして肩に置いた。

「昔よくこうやってもらつたなあ・・・」

日番谷は友達がなくて、相手といえば雛森かばあちゃん、そしてこの？丹坊くらいだった。

「冬獅郎さん、隊長つでえのはどんなだ？だのしいが？」

「うーん・・・」

難しいなあ・・・

副隊長はサボりまくってるが、他の隊員たちはみんな真面目に仕事してくれてる。

仕事が多くて・・・・・・

俺の場合年が若いだけに気を使うところもいろいろあるしな・・・

「

「いろいろだいへんなんだな・・・」

しばらくの間、話が弾む。

「また明日来るぜ。」

日番谷は振り返って少しだけ手を振って別れた。

「ばーちゃんっ！

ただいまーっ。」

一人の影が日番谷に気付く。

「おや、冬獅郎かい？

おかえり。」

おばあちゃんが玄関まで歩いてきた。

「これ。」

買ってきたよ。甘納豆。」

俺が出て行ってから、ばーちゃんは少しづつ元の体系に戻っている。

安心した。

「これはありがとうねえ。」

「今日さ、雛森も帰ってくるって。」

「あれまっ。桃も帰ってくるのかい。」

二人一緒になんて珍しいねえ・・・

今日はご飯奮発しないとねえ・・・」

久しぶりの家にごろんと寝転ぶ。

あー。

この感触・・・・・・・・。。

懐かしいなあ・・・・・・・・

なんか眠くなってきたみたいだ・・・・・・・・。

いつもこの時間には昼寝してるのだから、当たり前だ。

「シロちゃんっ！」

目が覚めた。

昔みたいな光景。

「あつ。起きた。」

おばあちゃん。シロちゃん起きたよー」

「顔．．．ちけーよ．．．」

懐かしい感覚．．．．．

俺の育った家。

ここですつと氷輪丸が呼んでいた．．．

色んな事を思い出す。

「おはよう冬獅郎。」

にここにこして待っていてくれる、ばーちゃん。

物思いに耽りながら、起き上がる。

「シロちゃんが寝てる間になっ、

これ、おばあちゃんにあげたんだよ!」

といって、目の前に出したのは・・・

九番隊が編集している写真集”冬のライオン”とグラビアカレンダーだった。

カレンダーなんかもう飾られていた・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

おいっ!!!!!!!!!!

ちょっと待てっ!!!!!!!!!!

お前っなんでそんなもん持ってたんだよっ!!!!!!!!!!」

めちゃくちゃ焦った。

まさかそんなものを雛森が持ってくるなんて思ってなかったからだ。

「えーっつと・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

内緒っ。」

雛森は少しテレながらてへっ。っと悪戯っぽく笑う。

それはそれで可愛いのだが、何かがおかしい。

「松本だろっ！！」

日番谷が叫んだ。

「なっなんでわかったの？」

乱菊さんに言わないでっって言われたのにー（アセアセ）」

ごめんなさいっ。乱菊さん・・・と雛森は心の中で思った。

「まーっもーとーっっっ！！戻ったら覚えとけよ・・・・・・・・」

いつもの事である。

「ここに戻る途中に出会って、渡されたのよ。」

でもね、シロちゃん。

おばあちゃん、本当に喜んで見てくれたんだから。」

雛森がフォローする。

おばあちゃんがにこにこしながら二人を見守っている。

「二人とも元気で何より。」

「ばーちゃんにはそのことが一番嬉しいんだよ。」

「ばーちゃん……。」

「冬獅郎も桃も元気で楽しくやってくれたならそれだけで、ばーちゃん嬉しいよ……」

「さあ二人ともご飯お食べ。」

いつも優しいばあちゃん。

その優しい声を聞くだけで安心感が得られる。

ご飯を食べながら、3人はいろんな話で盛り上がる。

雛森は自分の尊敬する隊長の話。

日番谷は自分のさばってばかりの部下の話がほとんどだった。

寝る時間になると日番谷と雛森の間に座り、二人の胸の上をポンポンしてくれる。

「ばーちゃん・・俺もう子供じゃないんだぜ・・・・」

「小さいときを思い出すわ・・・・」

二人はその懐かしい安心感に捕らわれ、すぐに寝入ってしまった。

そういう大きくなった二人を見ていた。

「いつの間にこんなに大きくなったのかねえ・・・・」

こんなに小さかったあの二人が・・・・

死神様の隊長、副隊長だなんて・・・・。」「

おばあちゃんの目から涙が出て止まらなかった。

そのことを二人の若僧は知る事はなかった。

「ふぁーーーーー。早いかな・・・。」

目が覚めた。

ここに帰ってきたときは、おばあちゃんが困らないように、枯れ木や枝を集めて置いておくのだ。

「しーろちゃんっ!」

先に起きていたらしい雖森が後ろからドンッと背中を押した。

「うわっ!! おっおきてたのかよっ!!!!」

びっくりしている日番谷。

「お前・・・寝シヨンベンはしなかったのか?」

仕返しにちよつと意地悪に言った。

「っもう!!」

何十年前の話してるのよっ!!!!」

ちよつとは覚えがあるらしい。

こういう光景も懐かしかった。

「そんなことはどうでもいい。」

いくぞ、雛森。」

「うん！昔みたいにとっちが多く集めるか競争ね」

「！！！！！！まけねーぞっ！！」

二人は走り出した。

日番谷は途中、雛森の友達にも会ったが、特になんとも思わなかった。

昔は目に見えるところにいただけでも嫌だったのに。

今は仲間もいることで、精神的にも強くなっていたのだ。

「もーシロちゃんたら、自分の体小さいのにそんなにっ……………！！」

大笑いしてる雛森。

「っるせーよ……………」

前が見えないくらい枝を抱えている日番谷。

二人が帰ってきた。

「お帰り。いつも帰ってくるたびにありがとうねえ……。」

おばあちゃんが言う。

「おばあちゃん、シロちゃんたらねーっ……。」

「あ、こらっ！ 雛森っ！……言うなっ！……！」

そこにはニコニコわらってくれる優しいおばあちゃんがいた。

そんなこんなで夕方まで過ごした。

「ばーちゃん俺たちそろそろ帰るよ。」

おばあちゃんの顔を見た。

少し寂しそうだった。

「また帰ってくるからね……。」

雛森はおばあちゃんに抱きついた。

「また遊びにおいで。」

そう言つて見送ってくれるおばあちゃん。

大好きなおばあちゃん。

去っていく二人の子供たちを見ながら、

おばあちゃんは涙を拭った。

決して二人にはバレナイように……。

日番谷と雛森は？丹坊の元へ行き、門を開けてもらった。

そして雛森の五番隊隊舎の前まで雛森を送っていった。

「日番谷君、また戻るとき教えてねっ！」

「わかったよ……んじゃな……」

雛森の日番谷の呼び方が変わっていた。

日番谷は後ろをむかずに右手だけを挙げてサヨナラした。

そして日番谷は自分の十番隊隊舎に向かう。

「松本はちゃんと仕事してるだろうか……」

「執務室、少しだけ覗いていくか……」

執務室の前にたどり着き、ガチャッとドアを開ける。

「松本！ 今戻ったぞー・・・」

中を見ると・・・

「なんじゃこりゃ―――――っ！！！！！！」

日番谷の目にしたものは、酔いつぶれて寝てる松本。

そしてその周りには空き瓶が多数転がっていた。

「ま——つ——も——と——つ——

冷たい霊圧を漂わせて叫ぶ。

「はいっ!!!」

毎度のことながら常日頃からお叱りを受けてる松本。

条件反射で起きる。

「お前仕事はしたのか？」

「えっとーーーー・・・忘れてました」

「・・・・・・・・そうか・・・・・・・・今からできるよな・・・」

冷たい視線で松本を睨む。

「えーーーーっ、今からですかあ？」

「あっ!!! そうだ松本っ!!!!」

お前雛森に何渡してるんだよっ!!!!!!」

「おばあさん喜んでたでしょ？wたいちよー」

松本のペースに流され起こる気も起きず、呆れるだけだった。

「もういいから！

早く仕事しろっ!!!!」

「はあい・・・・」

そう言ってデスクに向かった松本。

「……！」

と口を押さえる。

げっ！！！！

こんなとこで吐くなよっ？！？！

便所行け便所つ！！！！」

涙目でうんうんと頷く松本。

走って出て行った。

「はあー・・・」

それから松本が戻ってきたのは、日付が変わった朝でした。

「ま——っつ——も——っつ——！！！！！！！！」

松本さんは、目の下に隈ができた隊長に、昨日のが演技だとバレて
散々怒られましたとさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8032h/>

帰省

2010年10月11日13時42分発行